HOPE Bourgogne

ヴェズレーの丘から

文芸評論家
饗庭　孝男

あえば・たかお
1930年、滋賀県生まれ。甲南女子大学文学部教授。フランス文学専攻。著書に「石と光の思想」（勁草書房）、「自然・制度・想像力」「西欧と愛」「経験と超越」「ヨーロッパとは何か」（小沢書店）、他多数。

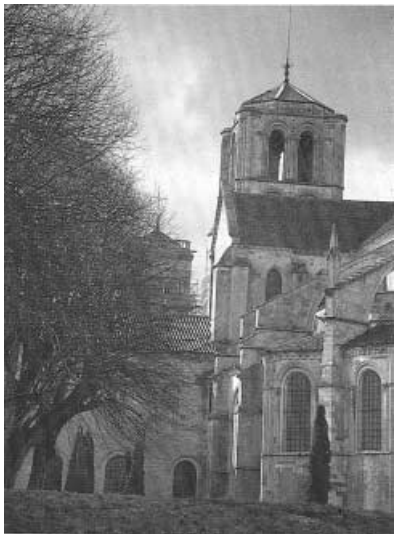
クラムシーの町を抜けてしばらく行くと丘の上にサント・マドレーヌ教会が見えてくる。ゆるやかに、しかし大きい起伏のあるブルゴーニュの野は光にみち、美しい川の流れにうるほされて人々の心を幸福にする。クラムシーは作家、ロマン・ロランが生まれた町である。彼はパリへ出、イタリアやスイスに住み、やがて晩年は、クラムシーから近いこのヴェズレーで過ごして亡くなっている。彼の住まいはサント・マドレーヌ教会へ上る丘の上の道のすぐ右にある。晩年はカトリックに近づき、よく教会への道を辿ったという。

私は8回ほどヴェズレーを訪れているが、どの季節にも懐かしい思い出がある。春の日、教会の後陣をとりまく高台から見下ろす野には杏の白い花が咲き、丘々をゆっくりと雲の影がわたってゆく。秋の日、枯葉に埋もれた高台も情緒に満ちている。

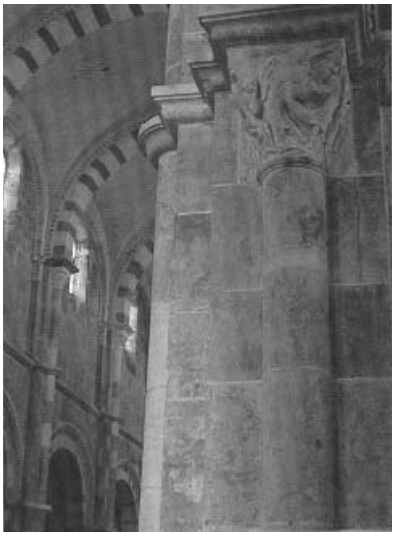
この教会の歴史は9世紀からあるが、ノルマン人の侵攻で廃墟になった後、11世紀半ばに今の教会がつくられたのである。伝説では、プロヴァンスで発見されたという、マドレーヌ（悔い改めの）の聖遺骨がここへ運ばれ、大巡礼をひきおこしたのである。また1146年、聖ベルナルドゥスはここで第2回十字軍の出挙を祝聖した。しかし13世紀になって、やはりプロヴァンスのサンマキシマンでマドレーヌの真の聖遺衣が見つかったとされ、以後ヴェズレーは急速にその栄光をうしなった。16世紀にはプロテスタントにも荒らされている。しかし、この教会を取りまく風景の美しさはブルゴーニュで一、二を争うほどであり、また美術史的にも見事な彫刻が多く、多くの人々の関心をあつめていることに変わりはない。

内部の洗礼者（ナルテックス）志願室の半円形壁面は、いわば中世ロマネスク美術のもっともすぐれた所産の一つである。それは復活後、「使徒たちに使命をつたえる栄光のキリスト」を中心に、時間と空間にわたり、神の宇宙を描き出したもので、楣石（まぐさいし）にローマ人、スキチア人、ピグミー人、また使徒たちの外側にユダヤ人、カッパドキア人、アラブ人、アルメニア人等が刻まれ、さらに12ヶ月の人々の労働や仕事を示す具体的なイメージと黄道十二宮（ゾディアック）がひろがっている。

流麗な衣紋のキリスト像から力強いその精神がうかがわれる。「視よ、我は世の終わりまで常に汝らと偕に在るなり」（マタイ伝）という姿である。労働のイメージとして、たとえば1月（農夫がパンを切る）、10月（葡萄のとり入れ）、12月（男の肩にのった老婆＝年越し）等、多くの柱頭彫刻が聖書的主題を刻む。善と悪の二元的対立が多いのは、当時の黙示録的雰囲気のあらわれであろう。このような作品を見終わったのち、私はいつも心ゆくまで、このブルゴーニュ、モルヴァンの野を高台から眺めるのであった。夕べも朝の光にも、それはたぐいのない美しさと心安らぐ風景であった。



サント・マドレーヌ教会



サント・マドレーヌ教会（内部）

Château de Chailly
シャトー・ドゥ・シャイイ

16世紀のルネッサンス様式のシャトーを改装したホテルです。現在、ゴルフ、リゾートクラブ会員として日仏友好会員を募集しております。
ルネッサンス・シャトーを軸として、何世代にも渡る日仏文化交流にご興味をお持ちの方はお問い合せ下さい。

問い合わせ先：㈱佐多商会　ブルゴーニュ事業部
TEL：03-3586-8873（東機貿ビル内）　担当：岩　沢